

【論文】

日本語を記載する『倭情考略』『籌海重編』

蔣 垂 東

Transliteration of Japanese Words in the *Woqingkaolüe* and the *Chouhaichongbian*

JIANG Chuidong

要 旨：

本文主要介绍《倭情考略》所收的汉日对音词汇。许多明清时期的中国古文献收有汉日对音词汇，这些汉日对音词汇不仅是研究日语的珍贵史料，同时作为汉语方言资料也具有重要价值。人们虽然早已知道《倭情考略》收有汉日对音词汇，但是由于种种原因这些汉日对音词汇的具体内容至今尚未被弄清。本文拟依据北京图书馆藏本的调查结果，揭开该书所收汉日对音词汇之面纱。同时对于另一部收有汉日对音词汇的文献——《筹海重编》之未明之处也进行探讨。

キーワード：音訳日本語、中国資料、寄語略、寄語島名、方言資料

0 問題の所在

古代中国の文献には中国人がその時々々の発音に基づいて漢字で書き写した日本語（音訳日本語）は少なからず見られる。こうした日本語は「中国資料」と呼ばれ、日本語の研究史料として重要視されている。また、近年中国語の方言資料としても注目を集めている¹。周知のように、漢字で書き写された日本語が見られる中国の文献は三世紀の『魏志（倭人伝）』²に遡ることができる。しかし、『魏志（倭人伝）』をはじめとする一連の歴史書の日本伝に散見する音訳日本語は、人名、地名、官名などほとんどが固

有名詞で、しかも、「邪馬台国」をめぐる近畿説と九州説による論争が続いているのに象徴されるように、それらの固有名詞には歴史的事実との比定で明らかにされていないものも少なくない。

古代中国の文献に、固有名詞以外の日本語の語彙が見られたのは、南宋の『鶴林玉露』³をもって嚆矢とする。しかし、同書に見られる日本語は、僅か二十個の単語に過ぎない。元末明初の『書史会要』⁴には、「いろは」四十七字が掲載され、外国の文献に見える「いろは」としては最も古いものであるが、中国の文献で多くの音訳日本語が見られるようになったのは明代中期以降のことであり、『日本館訳語』（1549年以前成立）⁵、『日本考略』（1523年成立）⁶、『日本図纂』（1561年成立）⁷、『日本一鑑』（1565年頃成立）⁸、『(全浙兵制考附録) 日本風土記』（1592年成立）⁹などがその代表的なものとして知られている。

中国の古文献における日本語の記載状況についてはすでに、浜田敦（1940）、安田章（1961）、大友信一（1963）、福島邦道（1965）など諸先学によって多くの点が解明されてきた。しかしながら、日本語を収録していることが知られていながら、どんな内容かが明らかにされていないものもなお存在する。本稿で取り上げる『倭情考略』もそうした文献の一つである。

呉玉年（1947）により『皇明馭倭録』（清華大学図書館本）と『倭情考略』に日本語が存するという事はすでに知られているが、日本には伝存していないため、

『皇明馭倭録』の清華大学図書館本の附録にあるという「日本寄語」や『倭情考略』中の「倭語」とは、どんな内容のものかが伺えないことは、誠に遺憾である（大友信一1963:138）。

といったように、その内容の解明が懸案となっている。

上記両書の内、『皇明馭倭録』についてはすでに前稿（蔣2001）にて、清

華大学図書館本のみならず北京図書館本にも日本語が存すること、及び同書所載の日本語は『日本考略』の「寄語略」と『籌海図編』の「寄語雑類」「寄語島名」を引用したものであるという事実を明らかにした。本稿では、『倭情考略』についても調査結果を報告して紹介を試みたい。

なお、『皇明馭倭録』と『倭情考略』の他に、日本語を収録したもので今一つ『籌海重編』という文献がある。同書については、金子和正（1958）による書誌学的な紹介があったものの、不明な点が残っているため、本稿ではそうした点についても検討してみたい。

1 『倭情考略』

1.1 著者と編纂の動機

『倭情考略』一卷は、揚州の知府で湖北武昌の人、郭光復の撰である。同書については、『四庫全書総目提要』（兵家類）に、

倭情考略 一卷 兩淮塩政採進本

光復、武昌人、官揚州府知府。考万曆己丑進士別有一郭光復、順天固安人、官至右副都御史、遼東巡撫、姓名偶同、非一人也。嘉靖中、東南屢中倭患、而揚州当江海之衝、被害尤甚。光復以為必得其情、始可籌備禦之術、因考次其所聞為此編、首總論、次事略、次倭患、次倭術、次倭語、次倭好、次倭船、次倭刀、載其情狀頗詳、蓋亦知己知彼之意、而得諸傳聞、未必一一確實也。

との紹介があり、倭寇による被害が深刻だった揚州の知府郭光復が倭寇防備のために編集したという。

成立時期については、自序に

万曆丁酉夏四月方城郭光復書于維揚公署

とあるので、万曆丁酉（1597）頃に出来上がっていたことが分かる。

編纂の動機については上記『四庫全書総目提要』の解題にすでに紹介があったが、自序を通じてより具体的に知ることができる。

今倭窃拋朝鮮、雖日窺伺我中国、然年来沿海一带稍稍有備矣、彼豈遽敢称兵入犯、即入而我水戰以挫其先鋒、焚舟以絶其去路、倭豈能得志於我、惟是江北承平日久、民不習見兵革、一聞警息、鮮不股慄、則以未知倭情故也、兵法貴知彼知我、夫所謂彼我者情也、知其情則知有所以禦之、可無懼倭矣、不倭叨守維揚乏綱繆計、每閱籌海編及旧所考、聞得其倭情之略、因彙集成帙、而授之刻曰倭情考略、刻成遍布軍民…以下略

すなわち、沿海部の海防が整備されるにつれ、揚州では泰平の日が長く続き、軍民の警戒心がすっかり薄れてしまった中、豊臣秀吉による朝鮮出兵で、中国沿海では状況が再び緊迫したため、倭寇防備の必要性を強く感じた著者は、軍民の警戒心を呼び起こすべく『籌海図編』など日本研究書を参考にしてこの書を編纂し、軍民に広く配布することにしたという。

1.2 構成と内容

同書は、北京図書館には明万曆刊本と清抄本が各 1 本存する¹⁰。刊本は九行二十字で、抄本は九行十九字である。本稿が従う刊本では、巻首に

方城郭光復纂集
東臯郭師古校正

とある。他の日本研究書や海防書に多く見られる地図がなく、内容は、

倭情考略序（揚州知府郭光復）

倭情考略叙（揚州府推官徐鑾）

総論（淮揚の地理的位置、倭寇による被害状況及びその対策）

倭国事畧（『籌海図編』巻二「倭国事略」項より引用）

倭患（『籌海図編』巻六「直隸倭変記」の「淮揚」項などより引用）

倭術（『籌海図編』巻二「倭国事略」の「寇術」項より引用）

倭語（『籌海図編』巻二「倭国事略」の「寄語雑類」項より引用）

倭好（『籌海図編』巻二「倭国事略」の「倭好」項より引用）

倭船（『籌海図編』巻二「倭国事略」の「倭船」項より引用）

からなり、「総論」と「倭患」を除き日本に関する情報はほとんど『籌海図編』巻二「倭国事略」の記事を引用している。前記『四庫全書総目提要』の解題は「得諸傳聞、未必一一確實也」と、同書が集めた様々な情報は伝聞であるため必ずしも事実ではないとしているのに対し、呉玉年（1947）は、

惟是時海禁綦嚴、考查頗不易、決不能乘桴浮海、而能摭遺聞逸事、其用心亦良苦矣。

と述べ、海禁政策で海外渡航が厳しく制限された当時、情報の収集が容易でなく、船に乗って海（情報収集）に出ることは不可能であったため、かかる状況では伝聞でもやむを得なかったと弁護している。

なお、『四庫全書総目提要』の解題では、同書の内容が「総論」から「倭刀」までとなっているが、筆者が調査した北京図書館本には「倭刀」にあたる項目が存在していない。

1.3 日本語語彙

日本語の資料となるのは、「倭語」である。「倭語」では、天文類（11語）、時令類（17語）、地理類（9語）、方向類（6語）、珍宝類（8語）、人物類（64

語)、人事類(91語)、身体類(14語)、器用類(45語)、衣服類(10語)、飲食類(20語)、花木類(9語)、鳥獸類(11語)、數目類(16語)、通用類(27語)、15の意味類別に、「天 天帝」「日 虚露」「月 禿計」などのように延べ358項目の漢語が掲げられ、これにあたる日本語が音訳漢字で示されているが¹¹、『籌海図編』巻二の「寄語雑類」をそっくり転載しているに過ぎない。なお、「倭語」を載せた理由について、

此中無通事、其倭語率不曉辯、然其出沒号令、即秘密必見之詞、
我人熟習其語、或以偵探、或以間諜、可知備矣、故志之。

との説明があり、揚州に日本語のできる通事がないため、倭寇の号令や暗号を理解するには日本語を習う必要があるとして、掲載したという。

なお、同書所収の「倭語」と『籌海図編』の「寄語雑類」とは

	籌海図編	倭情考略
見出し語	音訳	音訳
銀	失禄 <u>措</u> 泥	失禄 <u>楷</u> 泥
姊	<u>亜</u> 尼	<u>亜</u> 泥
老实説話	買多 <u>溢</u> 多	買多 <u>益</u> 多

などの如く一部の音訳漢字に出入りが認められるが、その異同についての比較は別の機会に譲ることとする。

2 『籌海重編』

2.1 著者と編纂の動機

『籌海重編』十二巻は、鄧鍾の編である。書名からも分かるように『籌海図編』を編集しなおしたものである。

著者鄧鍾は、福建晋江の人で、字を元宇と言ひ、道鳴と号し、万曆丁丑

(1577) の進士である。

重編の動機については、『四庫全書総目提要』（地理類存目四）には、

籌海重編 十卷 兩淮馬裕家藏本

鍾字道鳴、晋江人、万曆二十年倭大入朝鮮、海上伝警、総督蕭彦命鍾取崑山鄭若曾籌海図編刪其繁冗、重梓成書、冠以各処海図、次記奉使朝貢之事。又分按江海諸省、記其兵防制變各事宜、而以経略諸条終之、以前代旧聞、亦間有引証、前有彦序一篇、極称胡宗憲功、亦当時公論也

との紹介があり、万曆二十年は豊臣秀吉が朝鮮半島に出兵した文禄元年にあたる年で、沿海の情勢が緊迫したため、総督蕭彦が鄧鍾に『籌海図編』の繁冗を削って作らせたという。

成立時期については、蕭彦の「新刻籌海重編序」の

万曆壬辰歳八月之望宛陵蕭彦書

の他、鄧鍾の「題籌海重編後」にも、

万曆壬辰歳重陽日晋江鄧鍾

とあるので、万曆壬辰（1592）の八月頃に出来上がったことが分かる。

2.2 構成とその内容

筆者の調査では、北京図書館に第十一巻と第十二巻を欠いた明万曆刊本、清華大学図書館に十二巻が揃った抄本がそれぞれ存する。『四庫全書総目提要』では「籌海重編 十巻」とあるのは、北京図書館本のような十巻本を指すのであろう。この北京図書館の十巻本については、呉玉年

(1947:163) に解題がある。なお、金子和正 (1958:54-58) によると、天理大学図書館にも十二巻本の刊本があるという。

同書は各巻の巻初に

崑山鄭若曾原編

晋江鄧 鍾重編

とあり、『籌海図編』を編集しなおしたことを示している。

天理大学図書館本に基づいて『籌海図編』との比較を行った金子 (1958) は、同本について原表紙が失われ、前序がなく、後序は二編あるが、二編目の最後の葉が欠けていると紹介した上、前序が欠けたのであろうと断りつつも、『四庫全書総目提要』の「前有彦序一篇」の記述に疑いの目を向け、また二編目の後序の筆者については鄧鍾かと推測している。

ここでは先ず同書の前序と後序について吟味してみたい。

北京図書館本と清華大学図書館本はともに、『四庫全書総目提要』の記述通り冒頭に蕭彦の「新刻籌海重編序」があり、続いて『籌海図編』の二編の序文、さらに『籌海重編』の凡例がある。凡例では、重編に関する十四箇条の編集方針が挙げられている。よって、天理大学図書館本は原表紙のみならず蕭彦の「新刻籌海重編序」と、これに続く『籌海図編』の二編の序文、さらには重編の方針を知る上で重要な凡例までもが欠けているということが分かる。

後序については、北京図書館本は最後の二巻を欠いたため、不明だが、清華大学図書館本に従えば、後序は二編ではなく、実は四編あるということが分かる。天理大学図書館本で最後の葉が欠け筆者が鄧鍾ではないかと推測される二編目の筆者も鄧鍾ではなく、袁昌祚である。鄧鍾の序は四編目である。すなわち、天理大学図書館本は二編目の最後の葉及び三編目と四編目の後序も欠けているということになる。以上を整理すると、『籌海重編』の構成は以下のようになる。

新刻籌海重編序（万曆壬辰歲八月之望宛丘蕭彦）

籌海図編序（嘉靖辛酉秋八月既望欽差巡撫江西等地方兼軍務都察院副都御史滁上胡松）

刻籌海図編（嘉靖辛酉冬十有二月朏日晋江鄭若曾）

凡例

卷之一 一統輿図、広東・福建・浙江・南直隸・山東・北直隸・遼陽海図

卷之二 王官使倭事略、倭奴朝貢事略、使倭針經図説

卷之三 広東総図、兵防官考、倭変紀、事宜

卷之四 福建総図、兵防官考、倭変紀、事宜

卷之五 浙江総図、兵防官考、倭変紀、事宜

卷之六 南直隸総図、兵防官考、倭変紀、事宜

卷之七 山東・北直隸・遼陽の総図、兵防官考、倭変紀、事宜

卷之八 朝鮮国図、朝鮮事略、日本国図、日本入寇図、倭国事略、寇踪分合始末図譜

卷之九～十二 経略

籌海重編後序（万曆壬辰秋望広東等処承宣布政使司左布政使費堯年）

籌海重編後序（万曆甲午重陽前二日東官袁昌祚撰）

籌海重編跋（万曆壬辰中秋鎮守広東等処地方総兵官前奉勅征蛮將軍左軍都督府都督檢事始童元鎮謹跋）

題籌海重編後（万曆壬辰歲重陽日晋江鄧鍾謹識）

2.3 『籌海重編』の凡例

金子（1958）は『籌海重編』と『籌海図編』との異同の比較に腐心したが、北京図書館本と清華大学図書館本の凡例に従えば、重編の方針を明瞭に知ることができる。凡例から、重編に際しては『籌海図編』の繁冗を削

ただだけでなく、地図の追加及び訂正、それに内容の増補なども行われているということが分かる。同書の史料的价值を知る重要な手がかりであるので、この十四箇条の凡例を以下に掲げておくこととする。

- 一 是編為籌海而作必冠以輿地全図者示一統之盛也旧本失今増入
- 一 不按図籍不可以知扼塞不審形勢不可以施経略辺海自粵抵遼延袤一万五千里皆倭奴入犯之处地形或凸入海中或凹入内地皆備載之旧本闕広二図多差訛今從新改正浙直以上見聞必真依旧図穩隲括之
- 一 載王官使倭及倭国入貢事略者見歴代之服叛不常附計路経者仮使事也¹²
- 一 各省先沿海総図使郡県衛所一覽尽在目中各府山沙図不復贅入
- 一 各省俱載兵防官考以見備禦之密且信地昭然即按籍可明功罪江北以上信地未悉当闕所疑
- 一 各省倭変記皆存其大者如攻城破邑及覆軍殺将之類其小小劫掠条往条来者不及縷載旧有大捷考過難殉節考今俱纂入倭変記中不重複嘉靖四十年以后係増入
- 一 各省事宜或採奏疎或摠誌籍或訪輿論皆仍旧章而稍損益之大都論及海防者載之其有關係雖大而与此書不相涉者弗及也
- 一 載倭国事略倭国国者所謂知彼知己百戰不殆也附入寇図者知所由入則知所由禦矣旧編在各省之前移各省之後庶華口得体朝鮮図説系新增
- 一 寇踪分合始末見倭党名酋中国之人居多禍之興有自来矣
- 一 経略必首冠原者何法家先案而後断名医因証而酌方況事必有端變不猝至識其端而予防其漸尤経略之上策也
- 一 当道海防長策或已經举行或行之未尽或一事而甲可乙否均備採摺與夫兵船火器兵器有図有説皆経略之不可無者故并收入
- 一 当事諸公仍旧名示可伝也

- 一 編中如尚書譚二華仍旧称海道少保戚南塘仍旧称参将者就其建功持議之日書之不敢改也
- 一 編中先広東次福建次浙直者従万里海図自南而北也各省兵防考粵先南澳閩先烽火浙先海寧者泣各省総図自北而南也

2.4 日本語語彙

『籌海重編』では、日本語の資料となるのは「寄語雑類」と「寄語島名」である。『籌海図編』では「寄語雑類」と「寄語島名」が卷二にあるのに対し、同書では卷八に入っている。上述したように、『籌海重編』はただ『籌海図編』の繁冗を削っただけでなく、内容の増補も行っているので、同書の「寄語雑類」「寄語島名」と『籌海図編』のそれとは違いがあるか否かを比較することが当然必要である。比較の結果、『籌海重編』の「寄語雑類」では天文類（11語）、時令類（17語）、地理類（9語）、方向類（6語）、珍宝類（8語）、人物類（64語）、人事類（91語）、身体類（14語）、器用類（45語）、衣服類（10語）、飲食類（20語）、花木類（9語）、鳥獸類（11語）、数目類（16語）、通用類（27語）、15の意味類別に延べ358個の漢字音訳された日本語の語彙¹³、「寄語島名」では「山城 羊馬失羅」から「三島 密什麼」まで計81の日本の地名¹⁴が掲載されており、いずれも、『籌海図編』卷二の「寄語雑類」と「寄語島名」をそのまま転載したもので、

	籌海図編	籌海重編
見出し語	音訳	音訳
豊前	字前	字前
酒盞	曬加藤計	曬加藤□
山	耶賣	爺賣

などのように、音訳漢字には一部の誤字、脱字、(同音)異字が認められたものの、増補または改訂の形跡は見当たらないことが確認された。

3 おわりに

以上によって、懸案だった『倭情考略』所載の日本語の内容が明らかに
なり、『籌海重編』についても書誌を含めその内容を一層具体的に知ること
ができた。その結果、『倭情考略』と『籌海重編』所載の日本語はいずれも
『籌海図編』から引用したもので、両書とも「日本寄語」の異本であるとい
うことが明らかになった。

さて「日本寄語」とは、『日本考略』を出発点とし、一連の書物において
「寄語略」又は「寄語雑類」などの名称で掲載された音訳日本語を指す。最
初に『日本考略』の「寄語略」を転載したのは、鄭若曾の『日本図纂』で
ある。『日本図纂』では、同書のオリジナルである日本の地名集「寄語島名」
と共に、『日本考略』の「寄語略」が「寄語雑類」の名称で掲載されている。
この「寄語島名」と「寄語雑類」は同じ著者による明代随一の日本研究書
といわれる『籌海図編』（1562年成立）を経て、前稿（蔣2001）で扱った『皇
明馭倭録』¹⁵（明萬曆年間成立）や本稿で取り上げた『倭情考略』と『籌海
重編』の他に、『登壇必究』¹⁶（明萬曆年間成立）、『武備志』¹⁷（1621年成立）
など後世の多くの文献に転載されるにいたっている。『（全浙兵制考付録）
日本風土記』も「寄語島名」及び「寄語雑類」の一部（人事類、鳥獸類、
通用類）を引用している。なお、清代の『續說郛』¹⁸（1647年成立）と『欽
定古今圖書集成』¹⁹（1725年成立刊）も「寄語略」を「日本寄語」の名称で
掲載している。

「日本寄語」は「中国資料」の中では特に読みにくいものとして知られて
いる。その原因について、

本来読みにくい本文が、たびたび転写され、覆刻されるに際し、
やはり、日本語を知らないものの手によって行われたために、魯
魚焉馬の誤りを重ねて行ったことでなければならない。

と浜田敦（1965:79-80）は指摘している。「日本寄語」の出発点である『日本考略』の原刊本が散佚してしまい、また最初に『日本考略』から「寄語略」を引用した『日本図纂』も清代のテキストしか現存していないため、実見できるテキストの多くは転写や覆刻によるものというのが現状である。従って、「日本寄語」を正確に読むためには、なるべく多くのテキストを使つての比較照合が必要となる。明代成立の古いテキスト『倭情考略』と『籌海重編』の存在が確認できたことによって、「日本寄語」の解説に参照しうるテキストが増えた点で少なからぬ意義があると言えよう。

注

- 1) 例えば、丁鋒（2001）『同文備放音系』（中国書店）では、『日本図纂』の「寄語島名」が16世紀の呉方言資料として用いられている。
- 2) 「邪馬台国」など地名（国名）31、「卑狗」など官名14、「卑弥呼」など人名9が見られる。
- 3) 廬陵の人、羅大経の編著。甲乙丙三編十八巻からなる。丙編巻四「日本国僧」の条に、日本国の僧・安覚から聞いたとされる二十個の日本語の単語が漢字で書き写されている。
- 4) 浙江黄巖の人、陶宗儀の編著。九巻補遺一卷からなる。巻之八「外域」の部では、日本僧・克全大用から教わったとするいろは四十七字（平仮名）が漢字音訳を添えて掲載されている。いろはに続いて、10個の日本語の単語が平仮名で示されている。
- 5) 明の会同館が通事養成のために作成した教科書。現存諸本の内、唯一ロンドン大学本に「嘉靖二十八年（1549）十一月望通事序班胡滂 褚效良、楊宗仲校正」の識語がある。天文、地理、時令など18の門別で566項目の漢字音訳された日本語が収録されている。
- 6) 浙江定海の人、薛俊の編著。沿革、疆域、州郡、属国、山川、土産、世紀、戸口、制度、風俗、朝貢、貢物、寇辺、文詞、寄語、評議、防御という17の略からなり、その「寄語略」には、天文、時令、地理など15の類別に362項目の音訳日本語が収録されている。
- 7) 江蘇昆山の人、鄭若曾の編著。日本国図、入寇図、日本国論、日本紀略、日本部落、風俗、寄語島名、寄語雜類、倭好、倭船、寇術、破寇法、使倭針経図説、日

本頁式、進貢方物、附録などの項目からなり、内、「寄語雑類」項には357項目の音訳日本語が見られるが、1項目を除いて全て『日本考略』の「寄語略」から引用したもの。また「日本紀略」項には147個、「寄語島名」項には81個漢字音訳された日本の地名が見られる。同書は同じ著者の『籌海図編』十三巻（1562）の第二巻にほぼそのまま転載されている。

- 8) 広東新安郡の人、鄭舜功の編著。「絶島新編」四巻、「窮河話海」九巻、「桴海図経」三巻からなる。「窮河話海」巻四には、「倭字倭（音）」として片仮名のイロハ四十七文字を掲げ、漢字音訳を添えて示している。また同巻五「寄語」には、天文、地理、時令など18の門に分類された3,404項目の音訳日本語が収められている。そのほとんどの音訳は「倭字倭（音）」のイロハに示された一仮名対一音訳漢字に基づいている。中国資料の中で最多の収録語数を誇っているが、それらの音訳日本語は古辞書類の語彙を音訳漢字に置き換えただけに過ぎない。
- 9) 『全浙兵制考』三巻の附録、5巻からなる。江蘇金山衛の人、侯継高の編著。第一巻は『籌海図編』の「寄語島名」を引用している。第三巻では、京を含めた「以路波四十八字様」が掲げられ、これに数個ずつの音訳漢字が当てられている。続く「歌謡」項で39首の和歌が漢字・仮名交じりで掲げられ、漢詩訳が付されている。第四巻の「音音」では、天文、時令など56類に分類された1,157項目の音訳日本語が収録されている。内「鳥獸類」「人事類」「通用類」は全て『籌海図編』の「寄語雑類」から引用したもので、これらを除けば実際の収録語数は1,028項目となる。第五巻の「山歌」項には12首の俗謡、同「琴法」項に2首の歌が音訳で示されている。この他、「象碁」項以下にも散発的に音訳語が見られる。
- 10) 呉玉年（1947:163）によると、氏も同書の写本を架蔵しているという。
- 11) 「雲、小廝、艱難人、独眼人、揖」などの項目では、見出し語のみあって日本語の漢字音訳がついていない。
- 12) 清華大学図書館本はこの条と次の条との間には改行がなされていない。
- 13) 「雲、揖」項には日本語の漢字音訳がついていない。
- 14) 『籌海図編』と同様、「志摩、遠江、駿河、讃耆、相摩、石見、女島、多蕪、平戸、佐加関」などの地名には漢字音訳がついていない。
- 15) 江蘇太倉の人、王士騏の編著。『皇明馭倭録』九巻、『皇明馭倭録附略』二巻、『寄語略』一巻からなり、『寄語略』の日本語は『日本考略』から「寄語略」、『籌海図編』から「寄語雑類」と「寄語島名」を引用したもの。
- 16) 江蘇淮陰の人、王鳴鶴編著。全四十巻。第二十二巻東倭巻二に「寄語雑類」「島名」が見られる。
- 17) 防風の人、茅下儀の編著。全二百四十巻。巻二百三十一「日本考二」に「訳語」と「島名」が収録されている。
- 18) 陶珽編。その第十一に「日本寄語」が収録されている。

- ¹⁹⁾ 陳夢雷原編。「方輿彙編、辺裔典」第三十九卷「日本部彙考」七に「日本寄語」が収められている。

主な参考文献

- 大友信一（1963）『室町時代の国語音声の研究』至文堂
金子和正（1958）「籌海重編の紹介」（『ビブリア』第12号）
京都大学文学部国語学国文学研究室（1961）『（全浙兵制考附録）日本風土記』
〃（1965）『日本寄語の研究』
呉 玉年（1947）「明代倭寇史籍誌目」（『中国地理図籍叢考』所収、上海商務印書館）
蔣 垂東（2001）『皇明馭倭録』の「寄語畧」（『文教大学文学部紀要』15-1）
田中健夫（1958）「籌海図編の成立」（『日本歴史』第57）
陳 夢雷（清）『欽定古今圖書集成』（清雍正三年本、台湾鼎文書局影印本）
陶 珽（清）『續説郛』（清順治丙戌年刻本、台湾新興書局影印本）
浜田 敦（1940）「国語を記載せる明代支那文献」（『国語・国文』第十卷第七号）
〃（1965）「日本寄語解読試案」（『日本寄語の研究』所収）
福島邦道（1965）「日本国略 日本図纂解題」（『日本寄語の研究』所収）
松下見林（元禄元年）『異称日本伝』（改定史籍集覧第二十、近藤出版部）
安田 章（1961）「日本風土記解題」（『（全浙兵制考）日本風土記』所収）
渡辺三男（1966）『新修訳注日本考』新典社